

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 額の汗を拭いながら、山道を歩く。
- (2) 氷上の華麗な舞に拍手が沸き起こる。
- (3) 木陰のベンチで憩いのひとときを過ごす。
- (4) 街を循環するバスが新緑の並木道を走る。
- (5) フラシターで栽培したトマトが赤く色づく。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で

書け。

- (1) クモの切れ間から太陽が顔を出す。
- (2) 高原の牧場でニユギユウが草をはむ。
- (3) 外国へ行くために、リョウケンの発行を申請する。
- (4) 前夜にフって積もった雪が、朝日を受けて輝く。
- (5) 開会式で、ガクタイの迫力ある演奏が競技場に響き渡る。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

「その投げ方じゃ、だめだな。」

いきなり背後から聞こえた声に、純也はびっくりして、ボールを投げようと振り上げていた手を思わず止めた。

振り返ると、伊予灘の方角に沈もうとしていた夕陽が目飛び込んで、相手が黒い影にしか見えなかった。草叢に立つ自分より背の高い影が、また声を上げた。

「その投げ方じゃ、カーブは曲がらないぞ。」

純也は夕陽にグローブをかざし、相手の顔を見た。てっきり年長の男児だ、と思っていた影が、スクートを穿いているのに気付き、よけいにびっくりした。

両手を威張ったように腰に当て、仁王立ちしている憎好は、スクートを穿いていなければ、年長の男児にしか見えない。このあたりでは見かけない顔だった。

(1)

「何だ？ おまえは……。」

純也は驚かされたことに腹が立って、ぶっきら棒に言った。

「だから、その投げ方じゃ、カーブは投げられないって言った。」

相手も怒ったように言い返した。

純也はだじろいだ。しかしすぐに相手が自分とそう年が変わらない少女だとすることに気付いて、

「故とけ。」

と怒鳴り返した。

純也はボールを投げていた廃工場の壁にむき直って、左足を上げ右腕を

背後に引いた。投げようとした瞬間

「だめだつて、それじゃ。」

と相手が大声を出し、純也の指先を離れたボールはとんでもない方向

に転がってしまった。

ハッハハ、相手が笑った。純也は頭にきて少女を睨み付けた。

「おまえ、うるさいんだよ。おちへ行け。」

それでも少女は白い歯を覗かせて、笑っている。純也は舌打ちをして

ボールが消えていった草叢の方に走り出した。ボールを拾い、マウンド代

りにしていた場所に戻ろうとすると、少女はまたそこに立っていた。

純也は相手を無視することに決めた。

純也は壁にむかつてボールを投げた。力んで投げてみるのだが、上級生

の投手が投げるようにカーブが上手く投げられなかった。同じ歳の少年の

中では、純也は一番速い球を投げる事ができると自負していたし、スト

ライクを何球も続けて放ることができた。来春、三年生になれば、町内の

年少組の野球部に入れる。そこで純也はピッチャーをやりたいかった。七か

し少女が言ったように、カーブが上手く曲がらない。

— うん？

純也は投げるのを止めて、首をかじげた。

— なせ、あいつ、俺がカーブを投げる練習をしているのがわかったん

だ？

純也は少女の方を振りむいた。少女は同じ姿勢で立っていた。

「あのき、その握り方じゃ、ボールは曲がらないんだよ。」

— 握り？ 何を言ってるんだ、こいつ…。

(2) 純也は眉を上下して、少女を見直した。

聞き慣れない言葉遣いもそうだが、相手の言いはどこか自分を馬鹿

にしているような感じがあった。

「じゃ、おまえがカーブを投げられるんなら、投げてみるや。」

純也が言うど、少女は、いよいよ、と平然とした顔で歩み寄り、純也の

手からボールを取り、壁にむかつて背筋を伸ばして立ち、ボールを握っ

た左腕を二度ぐるぐると回転させた。

— サウスポーク…。

純也が胸の中でつぶやいた時、少女は右足をゆっくりと上げ、右手を前

に突き出し、左手を大きく上げて一気に振りおろした。ボールは壁の手前

でプレーキがかかったようにカーブし、純也が壁にチョークで描いていた

ストライクゾーンの真ん中に当たり、ポントという乾いた音を立てた。

(3) 純也は口を半開きにして、壁と少女を交互に見た。ボールもよく曲がっ

たが、それ以上に少女の投げたボールには迫力があつた。

— な、なんだ、こいつは…。

少女は少し不満そうな顔をして、首をかじげていたが、純也を見てにこ

りと笑った。そうして草叢に入り、ボールを拾って戻ってくるど、ボール

を握った手を純也に見せた。

「ほら、人さし指と中指をこうやって少し外にずらすんだ。やってみな。」

純也は少女が握って見せたやり方で、ボールを握ってみた。

「運うよ。もう少し外にずらすんだ。」

純也が指をずらすと、ボールが手からこぼれ落ちた。少女はボールを

拾って純也に渡し、ぎこちなくボールを握っている純也の指の上から彼

女の指を覆おほい被おほせるようにした。温かい手だった。

「ほら、こうだよ。親指もしつかり握にぎってないとだめだ。ちいさい手だな……。でも毎日練習すれば握にぎれるようになるよ。」

そう言われて少女の手を見ると、純也よりひと回り大きかった。

「こうしてごらん。」

少女は言いって、左手の人さし指と親指の腹を合わせて、パチンと音を

立てた。純也は右手の指で同じようにしたが、音など出なかった。

「ボールを放す時、この感じで放すんだ。すぐにできなくても、きつと

できるよ。」

そう言いって少女は左手を振りおろしながら指で音を立てた。

「はあ……。」

**原** (4) 1つの間にか少女にながずいている自分に気付いて、純也は唇を噛んだ。

「おまえ、どこの誰や?」

純也が言いって顔を上げると、少女はもう草叢のむこうまで走り出して

いて、頑張れよ、と男のような言葉を残して立ち去った。

「チエッ、何が頑張れじゃ。」

純也は舌打ちし、右手の人さし指と親指を鳴ならそうとしたが、何も音

はしなかった。

(5) 周囲を見ると、すでに陽は落ちて晩秋の薄闇が原っぱにひろがろうとしていた。

「あつ、いけねえや。」

純也は言いって、あわてて走り出した。

(伊集院静「どんまい」による)

【問1】「何だ? おまえは……。」とあるが、このときの純也の気持ち

ちにも近いのは、次のうちではどれか。

ア 自信があるカーブの投げ方を否定されたことに不快を感じ、親し

に話しかける少女の態度に反感を覚えている。

イ 少女から怒りをあらわにして声をかけられたことで怒れを感じ、ど

う答えてよいか分からずにとまどいを覚えている。

ウ 見ず知らずの少女から不意に声をかけられたことで動転するとも

に、自分が驚かされたことに怒りを覚えている。

エ 自分の投げ方からかわれたことにおどおどともに、いつまで

もしつこく冷やかしてくる少女に困惑を覚えている。

【問2】純也は肩を上下して、少女を見直した。とあるが、純也が「肩

を上下して、少女を見直した」わけとして最も適切なのは、次の

うちではどれか。

ア カーブを投げられないわけを丁寧に指摘しながらも、馬鹿にするか

のような態度を取る少女の気持ちをはかりかね、不安に思ったから。

イ カーブの練習をしていることを見抜くとともに、自分の理解できな

いことを言う少女が、どのような人物かを確かめたいと思ったから。

ウ 学年で一番速いボールを投げられることに誇りをもっている自分を

少女がけなしてくるので、絶対に見返してやろうと思っただから。

エ 少女がカーブの投げ方を教えてくれたことに驚き、初対面の自分に

対して親切に接してくれているのはなぜかと不審に思ったから。

【問3】純也は口を半開きにして、壁と少女を交互に見た。とあるが、

この表現から読み取れる純也の様子として最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 目の前にいる少女が自分を圧倒するほどのボールを投げたということが信じられず、何が起きたのかを確かめようとしている様子。
- イ 見事なカーブを投げた少女が実力をひけらかすような表情を見せたことに驚いて、どうしたらよいか分からずにあきれている様子。
- ウ ボールがあまりにも大きく曲がったことをおかしと思う少女が何か巧妙な手段を使って投げたのではないかと疑っている様子。
- エ 少女の投げたボールが自分の投げるボールとは比べものにならないほど速かったことに慌ててしまい、ひどく取り乱している様子。

【問4】(4) 一つの間にか少女にうなずいている自分に気付いて、純也は唇を噛んだ。とあるが、このときの純也の気持ちに最も近いのは、

次のうちではどれか。

- ア カーブの投げ方を少女から細かく教えてもらっているにもかかわらず、上手に投げられないことに情けなさを覚え、悲しく思っている。
- イ 少女の言うとおりにいくら練習しても、カーブを投げられるようにならないのではないかとというあせりを覚え、心もとなく思っている。
- ウ 初めて出会ったのに熱心に教えてくれる少女への感謝を、うまく言葉で伝えられない自分にもどかしさを覚え、腹立たしく思っている。
- エ 知らず知らずのうちに少女の実力を認めさせられ、反発しつつも結局は素直に従っている自分にふがいなさを覚え、悔しく思っている。

【問5】(5) 周囲を見ると、すでに陽は落ちて晩秋の薄闇が原っぱにひろがるうとしていた。とあるが、この表現について述べたものとして

最も適切なものは、次のうちではどれか。

- ア 純也が少女からカーブの投げ方を教わった瞬間の情景を、晩秋の夕暮れの鮮やかな色彩に着目して絵画的に表現している。
- イ カーブを投げる練習に没頭していた純也が我に返る瞬間を、晩秋の日没の情景に重ね合わせて印象的に表現している。
- ウ 指を鳴らそうと思ってもできなかった純也が失望した瞬間を、闇が広がっていく晩秋の情景によって象徴的に表現している。
- エ 少女の実力に驚かされた純也の動揺と晩秋の夕陽が沈んでいく瞬間とを、巧みに描き分けて対照的に表現している。

#### 4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

#### 【目】

明治時代の書に関する論争からはじめたい。書を、芸術(美術)の範疇とするかについて、小山正太郎(一八八二)、岡倉天心との間で、「書は美術か」という主題で繰り広げられた。洋画家である小山は

書を美術とするのに否定的で、書は言語としての符号にすぎず、人はその内容である詩や句などに感動するのであって書に感動するのではないとする。それに対し、天心は、書は単に文字を記すだけではない、そ

傍線

の造形を絶えず考究し新機軸を出していると、詩句のほかに書自身が与える感動もあるとした。さらに、書が詩句の従属物とするなら、絵画もその描く対象の従属物になると反論した。その後の小山の反論は出なかつたという。今でもこの論争は、書の根源にかかわるものであり、現代人にも通用する内容である。(第一段)

もともと中国では、書は三国時代には芸術の範疇でとらえられていた。それに対して画は、宋時代になってはじめて芸術の仲間になっている。こうした歴史から見ても、わが国では中国の影響を受け、書は長い間、文学や詩と並び、芸術の中心であった。それは、時代が変わっても周知の事実だったのである。それにもかかわらず、明治時代の急激な社会状況の変化のなかで、絵画やかつては宗教の一部、信仰の対象であったいわゆる仏教美術、彫刻、そして生活を飾る工芸などがしだいにその存在を確実にし、美術概念として確立されたのと異なり、明治時代のある時から戦前まで、書は美術からみてその外側のものとしてとらえられるようになつてしまつた。(第二段)

書とは文字を書く以上、素材は文字ということが前提である。そして、伝達手段である文字を素材としている点で、実用性を排除することはできない。(つまり)実用の文字からはじまり、その先に芸術性をそなえていくものである。したがつて、単に文字を書いただけで、実用の範囲に留まつていたのである。小山正太郎のように、感動は生まれにくい。しかし、そこに筆者の文字造形を修練した成果や感情や精神の深さが盛り込まれ、見る側がそれを感じられるようになれば、芸術としての資格がそなわつてくるのである。(1)この実用と(2)芸術の両面を持ち合わせることは

工芸の実用品が美術品となりえるのと同時に、そのほかの芸術との大きな違いのひとつであるうか。(第三段)

(2)また、文字に芸術性を感じさせるようになるには、文字そのものの造形の美しさが不可欠である。どのような形でも構わないが、そこに造形美が表れなければならない。線が大きくても、細くても、かすれてもそれらの組み合わせ、線と点画の緊張ある調和の美が必要である。それがあれば、その時の文字が読めなくても、意味が分からなくても第一印象で美しいと感じるはずである。(第四段)

(3)次に造形美を構成する要素にも触れていこう。それには線質や墨色、墨付き部分と余白との釣り合いなどがある。このなかで、線質は、十分な訓練がなされていればそれだけその人の訴える力となる。墨色は墨の選び方や、磨り方で個人差が生まれる。余白の残り方は、もつて生まれた感覚と訓練があれば、より美しい響き合いを演出することだろう。(第五段)

こうした条件をそろえた書に造形美を感じることができ、感動することができれば、なにが書いてあるのか読んでみようとと思うのが自然の成り行きてである。その結果として内容の鑑賞に進むのである。さらにその文字そのものに興味をもてば、作者と同じ筆順に従つて書かれた文字を目で追ひ、作者の筆の動きを追体験することも可能である。この時間を再現しながら鑑賞できるところも、ほかの美術との大きな違いである。(第六段)

また、造形美や書表現を獲得するためには、古典を学ぶことからはじめるのが過去から続けられたものとも一般的で正当な方法である。徹底して古典を習うことで、その古典に内在する書が発する精神性を獲得でき、それを乗り越えて自分自身の形ができていけるといわれる。文字を書かなければなら

文字  
造形美  
芸術

という制約、形を変えながら長い時間をかけて築きあげられた文字として  
 の造形上の制約、それらの狭い制約のなかでの修練こそ、そのもの本質に  
 迫ることが可能であると考えられている。徹底した制約での鍛錬を乗り越え  
 た時は、前のものよりわずかな進歩にすぎないが、それまでの基本をすべて  
 身につけているため、そこに生まれた新しさは堅固なものとなり、時代が  
 進んでも生き残る強さを獲得するのである。古典に立脚しない思いつきに  
 よる表現をしては、簡単に崩れ去る可能性が高い。(第七段)

過去の多くの独自の有名品は、構成や線質、墨色など、まず作品の  
 造形だけで感動できるものであるが、じっくりと観察すると、背景に古典  
 を習得した過程を経て独自性を生んでいることが感じられるものである。  
 古典を超えて新しく獲得する世界こそ、真に新しい美と認められるもので  
 あり、思いつきの造形美が世の中に残るには、よほどの偶然と運が必要で  
 ある。(第八段)

そうした背景がありながら、戦後から昭和三十年代には、ほかの美術に  
 対抗できる芸術であることを示すためか、書の芸術性を模索し定義する活発  
 な動きがあった。そして近年、「文字を素材とする造形芸術である」という  
 定義が一般的になった。この定義は、過去の名品を含むし、これからの書作  
 品づくりの指標ともなる。しかし、文字を素材にすれば、どんな造形でもよ  
 いとなると、書のみから逸脱することもありうる。歴史のなかで背負って  
 きた書としてあるべきための独自の制約を無視して新しい造形をつくったと  
 しても、その多くは書本来が持つ存在感が感じられないものとしかならない  
 であろう。古典にとわかれず、まったく新しい造形と想うものが生まれたと  
 しても、その作品を分析してみると偶然か天才的才能により、結果として古

典に見る造形美を踏まえていることになることだろう。しかしそうした例も

きわめてまれなことであり、通常はありえない。(第九段)

ほかの美術にもいえるであろうが、その美術が本来持つ造形美の根源を感

じさせなければ、真の進歩、その分野の新しい美は得られない。もし、古典

を学んだ後に、文字性を離れた造形美が確立されたとしたら、それは、書の

延長線上の、書の周辺の新しい造形美の分野になるだろう。それが、結果

として書の分野と判断されることがあるとしても、認められるまでにはこれ

から長い時間を経なければならぬはずである。(第十段)

(名兎耶明「書の見方」による)

【注】岡倉天心——日本の美術評論家、思想家。

(1) 書は美術からみてその外側のものとしてとらえられるように  
 なってしまった。とあるが、「書は美術からみてその外側のもの

としてとらえられる」とは、どういうことか。次のうちから最も適

切なものを選べ。

ア かつて書は文学や詩と並び芸術の中心だったが、明治時代に中国の  
 影響を受け、芸術ではないと認識されるようになったということ。

イ 書は美術として確立している工芸と違い、社会状況の変化のなかで  
 生活を飾らなくなり、実用の範囲から外れるものとなったということ。

ウ 書はもともとと宗教の一部として存在したが、仏教美術と同じように  
 信仰の対象を越え、今では芸術の範疇外のものとなったということ。

エ 明治時代から戦前まで、書は実用のものであり、絵画などを含む美術  
 術という概念に当てはまらないうと認識されるようになったということ。

(2) 問2) また、文字に芸術性を感じさせるようになるには、文字そのもの

の造形の美しさが不可欠である。とあるが、「文字に芸術性を  
感じさせるようになるには、文字そのものの造形の美しさが不可  
欠である」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切な  
ものを選べ。

1 ア 文字に、修練した成果と感情や精神の深さとを盛り込んだ文字造形  
の調和の美があれば、第一印象で美しさを感ずることができるから。

× 1 文字の造形を美しくすることで、誰でも読むことができるという美  
用性が高まり、素材の詩句が持つ芸術性も理解できるようになるから。

× ウ 書に、実用性がそなわろう十分な訓練をすることにより、芸術と  
しての資格も同時に持ち合わせることができるようになるから。

× エ 美しい墨色や余白の響き合いといった、造形の演出を文字に加える  
ことで、書く人のもって生まれた感覚や個性を反映できるから。

問3) この文章における第六段の役割を説明したものととして最も適切  
なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた書の芸術性について、その中心となる考え方  
を簡潔に要約することで、文章全体の結論を導き出している。

× 1 それまでに述べてきた書の芸術性を受けて、鑑賞に至る過程を順序  
立てて解説することで、論の展開を図っている。

× ウ それまでに述べてきた書の芸術性に基<sup>て</sup>づいて、根拠となる事実を整  
理することで、問題の所在を明らかにしている。

× エ それまでに述べてきた書の芸術性に対して、それに反対する立場か  
ら別の見解を示すことで、話題の転換を図っている。

(3) 問4) 古典に立脚しない思いつきによる表現をしても、それは、簡単

に崩れ去る可能性が高い。とあるが、筆者がこのように述べたの  
はなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 偶然か天才の才能によつて、古典にとらわれないまったく新しい書  
表現が生み出されることは、きわめてまれなことであると考えたから。

× 1 古典の徹底した制約を守るだけでは、自分が生み出す造形美に時代  
が進んでも生き残る新しさが加わる余地はないと考えたから。

× エ どんなに古典の造形美を踏まえて独自の表現を工夫しても、過去の  
名品を超える新しい美をつくることはできないと考えたから。

問5) 国語の授業でこの文章を読んだ後、「基本を身につけること」  
というテーマで自分の意見を発表することになった。このとき

にあなたが話す言葉具体的な体験や見聞も含めて二百字以内  
で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「など

もそれぞれ字数に数えよ。

次の「枕草子」に関する講演の記録を読んで、あとの各問に答えよ。  
なお、本文中の□で囲んだAは、講演で引用された「枕草子」の原文の一部である。また、あとの□で囲んだBは、Aの現代語訳である。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「枕草子」がどういう風にして書かれたか、出来たかは、多くの方がご存じのように「枕草子」の一番最後にある跋文<sup>はくぶん</sup>というか、後書きのようなものに書かれています。

A この草子、目に見え心に思ふ事を、人やは見んとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、あいなう、人のためにびんなきいひすぐしもしつべき所々もあれば、よう隠し置きたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

宮の御前に、内の大臣のたてまつり給へりけるを、「これになを書かまし。上の御前には史記といふ書をなん書かせ給へる。」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ。」と申ししかば、「きば、得てよ。」とて賜はせたりしを、…（略）…  
おほかたこれは、世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき、なほ選り出でて、歌などを、木・草・鳥・虫を、いひ出したらばこそ、「思ふほどよりはわろし。心見えなり。」とぞしられめ、ただ心ひとつに、おのづから思ふ事を、たはぶれに書きつけたれば、…（略）…（『日本古典文学大系』による）

これは要点だけ抜粋しましたから短くなっております。  
まず最初の段落の「この草子、目に見え心に思ふ事を」「つれづれなる

里居のほどに書き集めたるを」というところは「枕草子」の性格という点で大切であります。

「源氏物語」といえば紫式部<sup>むらさきしきぶ</sup>、「枕草子」といえば清少納言<sup>きよせうなごん</sup>というように、二人は大体同じくらいの時代にいましたが、その頃は文学でいえば物語の全盛期でした。現存の物語としては「竹取物語」「宇津保物語」「落窪物語<sup>らくくわものがたり</sup>」、そして「源氏物語」と成立していきました。

文学の実際の主流は和歌であり、それと並ぶのが物語であり、それと共に日記文学がありました。その当時であれば「和泉式部日記」などが有名です。紀貫之<sup>のりつらね</sup>の書きました「土佐日記」、その後、道綱母<sup>みちつなはは</sup>の「蜻蛉日記<sup>かげろふ日記</sup>」、そして「和泉式部日記」があります。

物語というのは実際のことをいいますと、「ものを語る」から物語というわけでございます。では「もの」というのは何かといいますと、現実にはいない、「もの」を主人公として書くのです。一番わかりやすいのは「竹取物語」のかがや姫です。竹の中から出て来たり、最後には天に昇ってしまうことは現実にはないことです。ですから物語は軽く言いますと虚構の世界、または架空の世界、もって簡単にいえば嘘の世界であるわけです。

それから日記の方も「土佐日記」も冒頭から「男もすなる日記というものを女もしてみんとするなり。」と紀貫之が女性になって書き、「蜻蛉日記」にしましても、「和泉式部日記」にしましても、必ずしも正確な記録ではありません。要するに自分を主人公にして描かれた物語、小説、今という私小説みたいなものが日記でした。今われわれがいう実録的な



日記としては、「枕草子」の少しあとに書かれた「樂式部日記」がそれにあたります。

ということとは、「枕草子」が、「目に見え心に思ふ」ことを「書き集める」ということは、事実を書くということとして、決して虚構を書くということではないのです。この部分が「枕草子」の反物語・反日記文学性を示しています。

<sup>(1)</sup> それではどのような過程を経て「枕草子」ができたかというのがその次であります。

清少納言が仕えていた一条天皇のお后である中宮定子の兄にあたる内大臣の伊周という者が、いわゆる草子、今でいうノートみたいなものを定子に差し上げました。「これになにを書かまし。上の御前には史記といふ書をなん書かせ給へる。」と中宮が言つて、草子の一部が清少納言に与えられた、とあります。もし中宮定子が清少納言に草子を与えなければ、現在「枕草子」は存在しなかつたかもしれません。

それでは次に何を書こうかというのは、三番目の段落の「歌などをも、木・草・鳥・虫をも、いひ出したらばこそ」というところで、このもつた草子に木・草・鳥・虫などについて和歌を書いたなら、「思ふほどよりはわろし。」とあるように、清少納言は歌が下手と言われたり、あなたの歌の程度がわかるわと馬鹿にされるので書かない、とあります。

当時、ある程度教養があり、文学を解する女性であれば、紙をもらつたらだいて和歌を書くと思います。文学的能力があり紙を多く貰えれば、物語や日記を書くかもしれません。しかし、彼女は物語や日記、和歌を書かないとしていたので、今日、われわれがみる「枕草子」のよう

な体裁になつてしまつたのです。<sup>(2)</sup>

これが「枕草子」成立事情の一つであります。

(木越隆『枕草子』の性格)による)

**B** この草子は、わたしの目に映り、またわたしの心に思うことを、<sup>(3)</sup> よもや人が見ることとはあるまいと思つて、所在ない里住いの間に、書き集めてあるのだが、全く無意味なつまらぬことから、人にとつては不都合な言い過ぎもしてしまひそうな箇所もいくつかあるので、うまく隠しておいたと思つたのに、気がついてみたら、心ならずも世間に洩れてしまつていたのでした。

中宮様に、内大臣様が献上しておおきになつたのを、中宮様が「これに何を書いたらいいかしら。主上におかせられては、史記という書物をお書きあそばしていらつしやる。」などと仰せられたのを、わたしが「それは枕でございましょう。」と申しあげたところ、「それならば、そなたに取らせよう。」という<sup>(4)</sup> ことで御下賜あそばされたのだが、…(略) …

大体これは、世の中においておもしろいこと、人がすばらしいな<sup>(4)</sup> どと思うはずのことについて、やはり選び出して、また、歌などについてを、木や草や鳥や虫のことも書き記してあるのならばこそ、「考えていたのよりはよくない。考えのほどもわかつた。」とそれらもしようが、そうではなくて、わたしの心の中だけで自然と考えることを、たわむれに書きつけてあるのだから、…(略) …

(「新編 日本古典文学全集」による)

〔注〕 史記——中国の歴史書。

男もする日記というものを女もしてみんとするなり。

——男も書くという日記というものを、女である私

も書いてみようと思つて、書くのである。

御下賜あそばされたのだが——くだきつたのだが。

〔問1〕 Aの中の——を付けたア、エのうち、現代仮名遣いで書いた

場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答

えよ。

〔問2〕 それではどのような過程を経て、「枕草子」ができたかという

のがその次であります。とあるが、この発言にみられる話の進め

方の特徴として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 時代背景を踏まえて清少納言の性格を考察する中で、順序を示す言

葉を用い、それまでの内容や特色を聞き手と共に改めて整理している。

イ 清少納言と関わった人物の逸話を紹介する中で、新たな人物が存在

することを聞き手に対して暗示し、交友関係の広さを理解させている。

ウ 文学の分類を説明する中で、このあとに例として「枕草子」を挙げ

ることを示し、聞き手が内容を身近に捉えられるように配慮している。

エ 引用した「枕草子」の原文に即して話す中で、原文の最初の段落か

ら次の段落へ進むことを予告し、話の展開を聞き手に意識させている。

〔問3〕 これが「枕草子」成立事情の一つであります。とあるが、ここ

でいう「枕草子」成立事情の一つについて説明したものであるとして

最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 清少納言は、下手と言われたり、馬鹿にされたりしないために和歌

ではない形で、見たことや思つたことをそのまま書こうと考えた。

イ 清少納言は、自然に関する和歌を草子に書いて、自分が文学を理解

している女性であることを、周囲に分かつてもらおうと考えた。

ウ 清少納言は、中宮定子から紙をたくさん貰うことができれば、物語

や日記を書いて、自分の文学的能力を発揮することもできると考えた。

エ 清少納言は、現代では私小説と呼ばれる作品と同じように、自らを

主人公として描く作品であれば、自分にも書くことができると考えた。

〔問4〕 よもやとあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。

ア 人が

イ 見ることは

ウ あるまいと

エ 思つて

〔問5〕 たわむれに書きつけてあるのだから、とあるが、ここでいう「た

わむれに」の意味に最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 大量に

イ 急いで

ウ 真面目に

エ 軽い気持ちで